
女子高生が安易に異世界トリップしてみる（仮）

あてび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子高生が安易に異世界トリップしてみる（仮）

【Nコード】

N8238W

【作者名】

あてび

【あらすじ】

地味な女子高生が安易に異世界トリップして剣を持ったり死にかけたり戦場を走ったりたくましくなったり泣いたり笑ったりしたりしなかったり安易に美形とガチバトルするような気がしないでもない話。

第0話 説明的なプロローグ

オーバルに整えられた鮮やかなピンク色の爪が、華奢なデザインのリップブラシを取る。大きなラメをたっぷり含むオレンジ色をとろりと掬って、どこか危うげな仕草で下唇に置く。

「シオはさあ、勿体ないよねえ」

広がるグロスが扇状的にてらりと光る。リップブラシを小瓶の中にくるりと一回回し、少女は楽しそうに笑った。

「顔とかイイ線行ってるのにね。胸無いけどお、でも何ていうか、雰囲気で損してる？」

「損？」

対する少女はやや眠たそうに頬杖をついて、横目のみを声の方に向けた。

「地味じゃん」

「地味かな」

「地味だよお。こんにちはーって挨拶して、別れたら三秒後に忘れられちゃう感じ」

「ひど」

「ゴメンゴメン。でもそういうヒト、結構いるっしょ」

「いるけどさあ」

メイク直しを終えた少女は、道具をしまいながらきやらきやらと声を立てて笑った。悪気は無いのだろう、と去らぬ眠気のまま億劫そうに瞬きする。

季節に合わせた明るいメイクがよく似合う通り、彼女もまた快活な、可愛い少女だ。多少周囲を振り回す気があるものの、それさえ魅力の一つにしてしまえるのは、ひとえにその容姿の良さによる。シオと呼ばれた少女はその現実をきちんと理解していたので、一連の評価を甘んじて受け止めた。

元よりあまり感情の起伏が激しい方では無い。

担任がやってきて、帰りのホームルームが始まった。いくらかの騒めきを残すままの教室から目を逸らし、ぼんやりと空を見つめる。

「（…天気、良いな）」

窓ガラスを通して視界に映る空は、既に日の盛りを過ぎた時間であつても抜けるように青い。そこにこの時期特有の積乱雲が高く白く自己主張している様は、ありふれてはいても一つの美しい景色だった。

けれど、それは視覚のみでの快さに過ぎない。

「あー…暑い…」

崩れるように机に突っ伏して呻く。あとほんの少しで夏休みに入るという事実だけが、明日から始まる期末テストとこの暑さへの慰めだった。

一ノ瀬シオという少女は、大概周囲に埋没した生徒であつた。

やや色素の薄い容姿　さくりと顎辺りで前下がりに揃えたショートカット、全体に鑿で思い切りよく彫刻したようなすっきりした顔立ち、凹凸に欠け手足の長い少年染みた体軀も相俟つて、あるいは真逆の性別であればちよつと目立つ生徒、という認識もされないではなかつたかも知れない。しかし彼女は紛うことなき女性であり、そうなつて見るとかわいらしさも肉感もない外見は味気ないものでしかなかった。彼女自身が、そういった己の身体的特徴を把握していながら「まあどうでもいい」で済ますような、年頃の少女にあるまじき性格をしていたのも理由の一端なのだろう。

数少ない友人は口を揃えて「ものぐさ」「面倒臭がり」「冷淡」「事なかれ主義」とシオを評した。そういう友人達も相当なものなので類は友を呼ぶというか、正直言われる義理は無いとシオは思っているのだが、せめて「クール」とでもいつてくれればまだ褒められたことに出来るのという恨めしさは一応ある。もっともその単語が正しくないことも知つてはいる。シオはひどく早熟な子供だつた。よく本を読んだ。シオの両親は共に公正で知的でウィットに富んだ人柄であつたので、シオを小さな友人として扱つた。その結果、シオは同い年のクラスメイトと比較して大人びている　本人に自覚は無いが、それが彼女を時にものぐさに、冷淡に見せ、しかしそれで浮くことも無く周囲に馴染ませていた。誰も、彼女本人ですら、

彼女の性質が空想家で情熱家で冒険家であることなど知らないだろう。彼女はファンタジーやサイエンスフィクションやミステリや古典　ドイツ文学・フランス文学・日本文学　や詩を愛したが、それについて語ることをしなかった。ただ感じたことを胸の内にしまい込み、その世界と日常との隔絶をやり過ごした。そうしなければならぬ程度に彼女はナイーブで、日常というものに失望していた。

「（世界というのはこんなものだろうか）」

それが、彼女の無意識の問いの一つである。格別珍しいものではなく、誰もが多少かれ少なかれそう思いながら過ごすように、彼女もまた同じ制服に身を包むクラスメイトたちを見つめながら意識せずそう考える。コンクリートの校舎、眠たくなる授業、昨日のテレビの話題、誰が誰を好き、誰と誰が付き合っている、繰り返し

ぱちんと泡が弾けるように目の前が変わった。

「ああ、あなただ」

微笑んだのは金色の目。風が、下から吹き上げていく。何が起きたかも分からないまま、考えられないままに、光の渦に抱き込まれた　そう、思った。

世界というのは唐突に、変わる。

第0話 説明的なプロローグ（後書き）

連載始めました。タイトルは仮なので、良いタイトルがあったら作者までご連絡下さい

ゆるゆる頑張っと思っています。

第1話 結局何も分かってない！

いつもと変わりの無い帰り道だった。

いつも通り、神社の境内を通ってっ少しだけ近道をしようとした、それだけのことだった。

突然吹き抜けた強い風。突風。呼吸もままなくなる一瞬。反射的にぎゅっと目を瞑ると耳元に触れた吐息。いつの間にか抱き締められて、いた。

「ああ、あなただ」

そうつと瞼を開くと黄金の目。

「みつけた」

微笑んだ、と思った。その瞬間　　ぶわりと下から風が吹き上げて何も分からなくなる。柔らかな竜巻に巻き上げられるように全身を暖かな空気が纏い舐めて、そうして。

そこから先の記憶が無い。

シオは本好きな子供だったし、本好きな少女だったし、そろそろ本好きな女性になろうとしている。

シオは本が好きだ。つまり、年の割には沢山の本を読み漁ってき

た。

「（『はてしない物語』とか…『これは王国の鍵』とか…いや、まあ、SFにもファンタジーにも昔っからよくある…あー、『十二国記』とか展開一緒じゃないか…）」

ぐるぐると思考を巡らせながら、天井を見上げて、木目を数えるでもなくなぞっていく。甚だしい現実逃避であることは確かだったけれども、そうでもしていなければシオは軽く泣き出しそうだった。

「（…異世界だって？）」

ぎゅう、と目を瞑る。眉を寄せる。ベッドの傍らの男が身じろいだのが分かったが、気を向ける余裕がない。何でも、その男いわく、ここは『異世界』で、シオのいた世界とは全く違う。異なる『選択』をなした世界なのだという。いわゆる、並行世界。パラレルワールド。目が覚めて最初に受けた説明の内容に、シオは男の正気を本気で疑った。到底、信じられる話ではない。顔色を無くしながらも何の冗談かと尋ねたシオへ、男は鷹揚に笑った。最初は、そう、なかなか信じられないでしょうね。

『けれど事実なんですよ。混乱しているでしょうから、少し、長い話でもしましょうか』

呆然とするシオの頬をそつと撫でて、男は静かな声で語り始めた。

この世界とシオの世界がどの選択によって分かれたのか、それを知ることは出来ない。あらゆる選択の度に世界は分かれ、並行世界は無数に、数限りなく存在する。そして一度分かれてしまえば、いずれの干渉も互いの間にはほとんど生まれえない。

男は名をシキといい、この並行世界間を移動する能力を有して生まれてきた。『探索者』と呼ばれるこの力を持つのは一つの世代に一人きりであり、また、先代が死ねば必ず直ぐに次の者が生まれてくるという訳でもない。シキは120年振りに『探索者』の力を宿して生まれ、120年振りの十三神子として仕事を行っている、と言った。十三神子というのは、この世界の神々から特別な力を与えられた　ということになっている　人間の十三番目のことで、他にあと十二人の神子があり、一神子、二神子と呼ばれるのだそうだ。ただし十三人全員が揃ったことは今までない。現在は約半数の六人の神子が立っているらしい。シキは穏やかに語りながら、惑乱も鮮やかなシオの頭をそつと撫でた。

「『探索者』と言ったでしょう。私はずっとあなたを探していた」

「…なんで…」

「……………」

につこり。この時初めて、シオはこの男が類い稀なる麗人であることに気付いた。そのことにときめくより先に、ぞくりと恐怖が湧いた。

「怯えないで」

シキが憂いを込めて囁く。

「時間なら、まだ、あります…一度に沢山のことを処理しようと思えば混乱してしまいますね。休んで下さい」

「私は帰れるの」

「ええ」

はっとシオが大きく目を見開く。美しい男はゆったりと微笑した。

「今、ではありません。でも、私がいるのですから、帰れます。帰して差上げます。…だから、どうか私に力を貸して下さい。我が君」

「…は？」

「今はどうぞ御休息を」

「ちょ、ま、」

す、と黙らせる意図でか大きな手が両目を覆ってシオを寝台に倒す。有無を言わせぬ動作にシオは仕方なく黙った。黙って、考え始めた。

そして、考えれば考えるほど訳が分からなくなっていくた。

何が起きているのだろう、何も分かっていないではないか。結局目の前の男は何で、何がしたくて、自分は何だと言うのか。何をしろというのか。

堪らなくなつて目を開けたが男は視界の中に居なかった。傍らには気配を感じる。落ち着こうとして、シオは木目を眺め始める。

「……はどっ」

硬く冷たい声が、広くない室内に落ちた。シキは閉ざしていた瞼を開き、寝台に目を向けた。

一人の少女が、天井を見つめて横たわっている。シキが近くを離れたからか、時間を置いたからか、横顔は随分と鋭利に、落ち着い

たものになっている。

「…ラクシュミという国の北の国境近く、アルバ山脈の端、レテ谷にある山小屋です」

知らない地名だろう。少女は溜息を吐くと、やはり天井を見つめたままゆっくりと唇を動かした。

「あなたは、私に何をさせたいんですか」

おや、と思う。シキは顎を指で辿りながら、注意深く言葉を繋いだ。

「…なぜあなたを連れて来たかは、お尋ねにならない？」

「同じことだと思います」

「なるほど」

笑みが洩れる。聡い少女であると思えた。泣き出してもおかしくない状況であるのに、声音は冷静を努めている。なかなか、胆力があるのかもしれない。ぎり、と奥歯を噛む音が聞こえてくるのだから、動揺はしているのだろうか。それも、かなり。

寝台に近づいて、そつと腰を下ろし、少女の髪を求めて手を伸ばす。細い少年のような肢体はぎくりと強張っても拒みはしなかった。

「いろいろなことを、ゆっくりお伝え致します。我が君」

「それ、さつきも…何なんですか、我が君って。私はあなたの主人なんですか」

「そうですよ」

透ける茶の目が大きく見開かれ、瞳孔がぎゅっと収縮する。

「あなたは私の、我らの王。我らが主。御身を迎えられたことを、心より感謝いたします」

「…は…」

「『幸いあれ』」

少女は言葉も無く息を飲む。

押し戴くように取り上げた髪の一房をさらさらと零した。目より淡い色合いの、薄茶の髪が白いシーツに散らばっている。その表情に怯えを見て取って、シキは目を伏せる。

金色の目が深さを増し、琥珀の色になった。

第1・5話 神々の時代

世界には、まずはじめに混沌が満ちていた。その混沌から一の神が生まれた。

次に二の神があつた。一の神がどこかに隠れると、彼は嘆き悲しんだ。彼は名をシュバイと言った。『嘆き』という意味である。

彼の涙から三の神が生まれた。彼女はミスマルという名だった。

『海』という意味である。シュバイの涙が海を作り、その中心から彼女は生まれ出た。そのとき彼女から滴った雫が四の神となった。名をルイといい、『月』という意味である。

月が出来たので、世界は夜になった。波の音が響いていた。それらはシュバイを慰めることが無かつたので、ルイは自分の目を海の中に投げ込んだ。美しい黄金の神が現れ、これが五の神となった。彼はミリアといい、『太陽』という意味である。

ミリアが余りに眩いので、ミスマルはミリアを恐れた。そして海の水が引き、大地が現れた。ミリアはこれに苛立ち、大地を踏み鳴らした。裂けた大地から六の神が生まれた。名をファルマといい、『大地』という意味である。

世界には海があり、大地があり、太陽があり、月があり、朝と夜があつた。しかしシュバイが慰められることは無く、彼は長い眠りにつくことを決めた。ミスマルは己を傷つけてそれを止めようとした。

三滴の血が滴った。彼らはそれぞれ七の神、八の神、九の神となり、名をクトー、ホルエファ、マクリと言った。『希望』『愛』『生』という意味である。

シュバイは応えて、己の髪を三筋与えた。彼らはそれぞれ十の神、十一の神、十二の神となり、名をテナー、オリ、エイシャといった。『時』『闇』『死』という意味である。

最後に、シュバイは己の血の一滴を垂らし、これにアレフと名づけた。『はじまり』という意味である。シュバイはアレフに一の神を探すように命じ、長い長い眠りについた。

(『神紀録』創世の章より一部抜粋)

第2話 そういえば箸についてもツツコミたかった

シキは、最初に彼自身が言った通り、様々なことを私に教えた。それはもう、様々なことを。様々過ぎることを。

その結果、どうやら私は『帝位篡奪者』になるらしいということが判明した。なぜそんな展開になったのか、私は今ひとつ納得いかないが、シキは忍耐強くこの国の歴史と神話を語って聞かせ、彼がいかに関教に染まったやばい人かを私に理解させた。この男に逆らうのは危険だと、声を荒げられた訳でも無いのに思ってしまった。これは相当だ。しかし、私だって訳も分からず帝位篡奪などしたくない。訳が分かっていてもしたくない。どうしてこんなことになったのか。

まず、この大陸 というより世界には、一つの神話しかないらしい。いや、一つの、というと語弊があるか。細かい派生や変化はあるのだが、いわば一つの神話体系で統一されている世界なのだそう。私の目から見ると、その神話は典型的な多神教だった。少し日本神話に似ているようにも思った。

で、多神教によくあるように、それぞれの神様を奉る神殿があるらしい。一応、神様の序列はあるらしいのだが、縁結びなら愛の神ホエルファ、豊作なら大地の神ファルマ、というように、どの神様も信仰され、大切にされている。そして、それぞれの神様の下に眷属たる精霊たちがいて、彼らの加護を得ることで この世界の人々の一部は、魔法を使うのだそう。この時点で、「あ、思い切りファンタジーか」と私は思った。

そして、十三神子は、神の加護を得た人間になる。シキは生れつき『アレフ』という十三番目の神の加護を受けていたため、十三神子の一人になったらしい。

更に彼は、十三神子のうち、二神子にあたる代帝シュバイの弟なのだという。つまり、…皇弟様？ちよつと意味が分からない。シキは軽く笑いながら、皇家の説明もしてくれた。

何でも、二神子である『シュバイ』という神の神子は、唯一世襲制なのだそうだ。シュバイは眠りについており、原初の神の一人であり、最高位の神であるにも関わらず、神子を選定することが出来ないから。

それ故に二神子は、その時存在する十三神子が協議して、皇族から相応しい者を選ぶ。同時にその者はトリカド神皇国の代帝を兼ね、十三神子のトップに立つらしい。何でこの一族が皇家になったのかというと、これまたややこしく神話の時代の契約が云々、とのこと。とにかく、政教分離という単語はこの世界に存在しないらしい。政治と神殿がどっぷり絡み合っている。

一応日本人である私には、こういう発想はあまり慣れない。そもそも神様とか神子なんてものが当たり前に受け入れられているのが不思議だ。まあ、魔法というものが存在するのならば、信じもするかとは思ふ。実感は全く無いけれど。

「おそらくシオ様も、訓練すればちゃんとお使いになれますよ」

シキはにっこり笑って言った。

「あなたは一神子、原初の神の加護を受けているのですから」

つまるところ、それが、この男が私を帝位篡奪者に仕立て上げようとする理由だった。

世界に海があり、大地があり、太陽があり、月があり、朝と夜が生まれた頃。シュバイは寂しさのあまり、多くの生き物を造った。とうとう一の神に似せた生き物さえ造った。しかし、シュバイの悲しみは癒されなかった。長い眠りにつくことを決めたとき、シュバイは彼らに言った。

『いつかあれが戻るまで、私の眠りを守るように。そして、あれが戻ったその時は、あれを頂きへと置いて、私の眠りを醒ますように』

トリカド神皇国の初代皇帝はシュバイに従い、彼の眠りの守護者となった。以来、トリカド神皇国はシュバイへの信仰を第一とし、国内最大の神殿もシュバイの神殿である。トリカドとは『眠る神』の意味である。そして、トリカド神皇国には代帝のみが存在し、皇帝の位につく存在はいない。

それは一の神のものだから。

「つまり、一神子たるあなたこそ、皇帝に相応しいのですよ」

あ、こいつ頭おかしいなとシオは思った。

場所は山小屋、シキは淀みなく喋りながら食事の用意を整えている。どこから出したものか、ほかほかのご飯は大変美味しそうだ。

そう、ご飯。ご飯なのである。

「何でお米のご飯が…」

シオはてつきり、この世界の食事は洋食に近いものだと思っていた。シキの顔立ちはいかにも西洋風な美形であるし、身に着けている服もファンタジーにありがちなたっぷりした西洋風の服。出てく

る固有名詞もどう考えたって片仮名表記に聞こえる。

しかし目の前に出されたのは、ほかほかご飯に鶏の照り焼き。それとサラダ。コンソメスープ。おかずは洋風と言えなくもないが、燦然と輝く白米にシオは胡乱な眼差しを向けた。シキに。

「…お気に召しませんか？」

「あのう、この世界の主食って、ご飯なんですか？」

「いえ、場所によってはパンや芋、バナナを主食にしているところも御座いますよ」

「はあ…バナナ… あのを、何で、言葉が通じているんでしょうか？」

「今更、それをお聞きになりますか」

からからと、楽しそうにシキが笑う。先程までの憂い顔との落差にシオの気分はついていけなかった。手慰みのように箸をとってちなみに、シオはかなり食い意地が張っている。シオの友人全員の一致した見解である もぐ、と白米を口に含む。

警戒もなく食物を口にしたシオに、シキの目が一瞬細まったことを彼女は知らない。シキは自身も箸をとると、食事に手をつけ始めた。

「あなたは、世界に受け入れられたのです」

「…世界に？」

「そう。だから言葉も分かる。文字も読めるでしょうね、書けるか

どうかはともかく」

「どういうことですか」

「そのままの意味ですよ。それこそが、あなたが一神子であることの証でもある」

「あかし…?」

「異世界のもの、つまり異物であるはずのあなたを、世界が受け入れた。あなたは世界にとって異物ではなかった。どういうことかお分かりですか」

「わ…かり、ません」

「あなたはここにいることが『正しい』のです」

深い琥珀の眼差しにぞっとする。

本当に元の世界に帰れるのだろうかという疑問が、シオの細い首を緩く締め付けた。

「まずはここ、ラクシュミの神殿へ向かいます」

妙に緊張した面持ちの少女に向かって、努めて柔らかく話しかける。少女は小さく頷くと、テーブルに広げた地図をおそろおそろ覗き込んだ。文字が本当に読めるかどうか気になる、といったところだろう。

果たして。彼女はぱちりと瞬きすると、地図の一点を示して言った。

「ここですか、ラクシュミって」

「ええ。それが国名です」

「…ほんとに読めるのか…」

驚いたような声音には、かすかに好奇心の色が滲む。それと共に、食事の途中からあつた怯えのようなものがいくらか和らいだように見えた。ぽそぽそと他の国名や川の名を呟く姿は妙に幼い。

どうもこの少女は、歳の割りに警戒心が薄い性質のようだった。それが育つた環境のためか、生来のものなのかは分からない。直していかなければと思う。

「文字はお読みになれるようですね。では、説明してもよろしいでしょうか、シオ様」

「え、あ、はい」

「まず…、私たちは、一の神の神殿へ向かいます。ここラクシュミは正式な名をラクシュミ神聖王国といい、一の神を奉る国家なのです。そこで、あなたが正しく一神子であるという保証を神殿に立ててもらいます」

「…してくれるんですか、保証」

「ええ、あなたは一神子ですから」

違う気がする…と小さい呟きが聞こえたが、黙殺する。

「ここが、今いる場所です。ルートはこう…三日程度でしょうね、神殿までは。ああ、そうそう、麓の村で一日滞在するので、四日かかりますか」

「村で何を…？」

「色々。あなたに会わせたい人間たちもいますし、調達したいものもあるので」

「はあ…」

「何にせよ、出発は明日ですので、今日は早めにお休み下さい。神殿についてからのことはまた後ほど」

こくりと小さな頭が上下する。思わず、そこに手のひらを置きたような衝動に駆られたのだが、それはどうにか堪えた。

主君に対してすることではない。更に言うなら、自分の柄でもない。

「…そうそう」

そういえば、ずっと言おうと思っていたことがあった。

「敬語はお止めくださって結構ですよ。名も、どうかお呼び捨てに。

あなたは私の王なのですから」

第2話 そっいえば著についてもツッコミたかった（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！励みになりますー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8238w/>

女子高生が安易に異世界トリップしてみる（仮）

2011年11月17日19時41分発行